城北巡検

木村　千賀子

7月7日，栗原先生ご指導の巡検日。天候はさっぱりしないが，王子駅集合で1日巡検が始まる。以前の1日巡検で船橋をやはり栗原先生にご指導いただいていたので，覚悟はできていたが…しかしそれにしてもすばらしい健脚である。見学する場所も数多く，内容豊富の1日巡検となる。

王子権現神社を皮切りに，正受院では近藤重蔵の甲冑の石像を見，貿易会社跡にできた国立醸造試験所へ，そして一等地に残る緑である飛鳥山と公園を歩き，渋沢栄一資料館に。明治の一級建築がそのまま残り，ため息がでる豪華なつくりと手の行き届いた庭園に目がひきつけられた。案内の方の手厚い歓迎に閉口するというハプニングもおきた。

王子，赤羽は陸軍関係の工場が置かれている台地である。戦後，軍事工場は住宅地へと変化していくのだが，残った工場もある。王子製紙は，もともと地券の紙の印刷からはじまった工場が残ったものである。戦前は化学工業中心だったが，軍事工場へと変わったことから様々な工業へと変わった。荒川の水を利用して，製薬工場，鉄鋼関係，色素工場，乳製品と本当に幅広い。また，住宅地として団地がつくられ，公団を中心に著しい数となっている。住宅と工場の連立するこの地区は一種独特な雰囲気をかもしだしていて，大崎方面の工場地域とは人が生活しているという点でまったく様相を異にしている。

最後に訪問したのが，この地区の工場の一つであるキリンビール工場である。昭和32年キリンビール第5工場として誕生し，後楽園の6倍の面積に400名が働き，1日に100万本のビールを生産している。ほとんどの作業を機械が行い，人間は機械の監視のみである。工場内は無人の場所が多く，歩き回ってもたまに人に会う程度である。オートメーションで小気味よくビールびんが流れ，次々に1本のビールができあがっていく。機械の素晴らしさと，人間性の全く無視された仕事を機械のように行う人間が印象強かった。このキリンビール工場も戦後誕生した一連の工場の一つであるが，工場水と交通の便のよさがこの地の利点だったようである。

キリンビール工場の見学を終えて解散となるが，私たちがぐったりしているのに対し，先生はまだまだ少しも疲れている様子でなく，自分の体のひ弱さをあらためて感じた。王子・赤羽地区の見学をかけ足で行ったわけだが，これを頭の中にもっとじっくり整理して焼きつけるにはまた少し時間が必要で，次回の巡検までにつける体力とともに課題として残った。

（7月7日　栗原教官指導）

館山巡検

松浦紅子

大学生になって初めての試験を終えると息つく暇もなく，10月1・2日の館山巡検へと我々1年は向かった。巡検は初めての経験だったので，実際にはどのようなことを行うのか，私は期待と不安の入り混じった心境で参加した。けれども事前の説明会で浅海先生が「今回は歩く巡検になる」とおっしゃっていたので，歩くことに関しては覚悟ができていた。

ところが1日目は宿舎である館山野外教育施設に到着して昼食をとり始めた頃から雨が激しさを増し，とうとう野外観察は中止となってしまった。そこで海岸段丘の形成過程や房総半島の南端部の畑累層・白浜層・野島崎層についての講義を受けるに止どまった。また。夜には和室に全員集合して先生と親睦を深めた。

2日目にはようやく天気が回復したので，当初

予定されていた観察場所を削る等，コースを変更しつつバスを乗り継いで徒歩観察を行った。

朝，宿舎を出てバスで一旦館山駅へ行くと，再びバスに乗り白浜へと向かった。途中，車中から景色を眺めていると青々とした山並と畑とビニールハウスが目に付いた。白浜のカーネーション，ストックは名高い。ビニールハウスの大半は花卉栽培のためのものだろう。一方，露地での花卉栽培は特に目に止まらなかった。花卉栽培は海岸の，冬でも温暖な気候を利用して，耕地不足のため収入の多い商品作物を作る必要から始まった。草花の露地栽培は畑10ａの収入が水田30ａの収入に劣らず，花畑からの収入は農業収入の半分を占める。安房では露地栽培が約75％を占めるが，近年ビニールトンネル，温室が増えてきた。このように恵まれた気候にもかかわらず，温室等が増加するのはなぜか，と私は疑問に思った。

白浜の島崎でバスを降りると北には房総丘陵が連なっていた。房総丘陵は今でこそ暖帯林で覆われているものの山麓の海岸線跡から，かつて侵食を受けた後，隆起して風化されたと考えられる。また山腹には海食崖跡の段丘もある。野島崎から房総丘陵を結ぶ線上には沼・元緑・大正段丘を含む５段ほどの侵食段丘が見られる。島崎から野島崎へ緩やかな坂を下る途中に，蛇行した水路のある畑が広がっていた。これは政府の減反政策により，以前の水田に水路を引いて少しでも水はけをよくし，畑として利用しているためである。

野島崎灯台上から東を見下ろすと波に洗われている岩列が見えた。砂岩・泥岩から成る畑累層のうち侵食作用に耐えた堅い岩質部分が列をなして見えるのが岩列で，関東大震災時に隆起した。

他にも野島崎には観察に値するものが多くあった。例えば亜角礫を含む岩石，ポットホール，互層，風紋のような模様をもつ砂岩である。野島崎の付け根では，キーベルトとして役立つ白い２筋の地層も見られた。

バスでフラワーパークへ向かい昼食をとったが，パークの見学は割愛して徒歩で布良へ向かった。家屋の建ち並ぶ細い急な坂を下ると，人工的に掘り込まれた布良の港があった。

次に平砂浦へと歩いた。平砂浦ではかつて一面に砂丘が広がっていたが，砂が風で飛ばされ人家等に被害を与えるため，砂止めが必要となり人工植林が行われ固定砂丘化が進められた。しかし浜に打ち寄せられる土砂で砂丘は今だにわずかながらも拡大の兆しを見せている。また平砂浦では，貝殻の破片・砂・礫等が海水に溶解しているカルシウム等の石灰質で固められたビーチロックが見られるはずだったが，実際には観察されなかった。

今回の巡検では中高校生時代から教科書や資料集でしか見たことのなかった岩石の侵食作用跡やポットホール，様々な地層等を自分の目で直接，観察することができ，満足だった。

房総半島はこれまで私の生活にはあまり関係のない土地だったため，特にこれといった興味は抱いていなかったが，巡検で自ら歩いて観察して回ったことにより，房総に興味を持った。というのも我々が１日の観察で訪れることのできる限られた場所だけでも地学で扱われるような様々の作用，地層等が実例として豊富に見られたからである。

今まで房総と聞いて単純に「花畑」くらいしか連想できなかったが，今後は今回の巡検で得た知識を大切にして房総を見ていきたい。

（10月１日～２日　浅海教官指導）

国土地理院巡検

山　田　昌　代

初めての館山巡検から１週間もたたない秋休みの終わりに，２度目の巡検として国土地理院の見学を行った。

８時30分，大学に集合，バスに乗り込み，常盤自動車道を通って一路筑波へ向かった。周囲は，田畑の広がる何ということはない田舎町だが，インターを降りてしばらく行くと様子が変わってきた。学園都市に入ったのだ。学園都市内は，道路区画や住宅がきちんと整備されすぎていて息が詰まるような感じがした。